九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「出島絵師」川原慶賀による《人の一生》の制作

野藤, 妙
西南学院大学国際文化学部

宮崎, 克則
西南学院大学国際文化学部国際文化学科 : 教授

https://doi.org/10.15017/1440946

出版情報：九州大学総合研究博物館研究報告. 12, pp.1-20, 2014-03. 九州大学総合研究博物館
バージョン：
権利関係：

九州大学総合研究博物館研究報告
Bull. Kyushu Univ. Museum
No. 12, 1-20, 2014

「出島絵師」川原慶賀による《人の一生》の制作

野藤妙　宮崎克則

西南学院大学国際文化学部
〒814-8511 福岡市早良区西新 6-2-92

The making of “The Life of a Japanese” by Kawahara Keiga.

Tae Nofuji · Katsunori Miyazaki

The Seinan University, Nishijin 6-2-92, Sawara-ku, Fukuoka 814-8511, Japan

はじめに

本稿は、川原慶賀（1786?-1860?）が描いたとされる《人の一生》に注目し、絵の制作過程について検討したものである。

川原慶賀、通称登与助は江戸時代後期の長崎の絵師である。正確な生没年は不明であるが、遺された作品から1786年生まれとされている。「出島出入絵師」[1]または「出島絵師」[2]として出島に出入りし、来日したオランダ商館員の求めに応じて日本の動植物や風俗、風景を描いた。出島に出入りし始めた時期や経緯については判明していないが、少なくとも文化年間には出島に出入りしていたと考えられる。慶賀の絵を収集したオランダ商館員としては、商館長ブロムホフ（Jan Cock Blomhoff: 1779-1853　来日1809-1813, 1817-1823）、商館員フィッセル（Johan Frederik van Overmeer Fisscher: 1800-1848　来日1820-1829）、商館医シーボルト（Philipp Franz von Siebold:1796-1866　来日1823-1830）が知られている。慶賀の絵とされている絵の多くは、オランダ商館員によって持ち帰られたため、海外に現存する点数は数百点にものぼり、主にオランダやドイツ、ロシアに所蔵されている。慶賀作とされている絵の中には慶賀一人で制作したとは考えがたい絵も含まれており、先行研究においても山梨絵美子氏、原田博二氏、永松実氏[3]によって慶賀の手によるものと他の絵師のものがあることが言及されている。特に、本稿で検討課題とした《人の一生》については、原田博二氏によってライデン国立民族学博物館と長崎歴史文化博物館所蔵、さらに個人蔵のものについて詳細な検討がなされており、複数人の分業により制作した、とされている[4]。また、山梨絵美子氏はサンクトペテルブルクにあるクンストカーメラに所蔵されている《人の一生》について検討しており、慶賀の弟子のものではないか、と述べている[5]。しかし、これまでの研究では、具体的にどのような方法で他の絵師と絵を制作していたのか、ということについてわかっていない。そこでフィッセルやシーボルトらによって収集された5セットの《人の一生》の作品群に注目し、慶賀がその他の絵師とどのようにして作品を制作していたのかについて検討を行う。

---

[1] シーボルト事件に慶賀が連座した際での1830年の「犯科帳」（長崎歴史文化博物館所蔵）に「出嶋出入　絵師　登与助」とある。
[2] 片桐和男、服部匡延校訂『年番阿蘭陀通詞史料』（近藤出版社、1977年）に収録された年番オランダ通詞名村八右衛門と馬場為八郎による1814の公務日記『万記帳』の中に、「出嶋絵師　登与次」という名が見られる。この人物は登与助、すなわち慶賀と考えられる。
[3] 永松実「川原慶賀と弟子の作品について」『秘蔵浮世絵大観8　パリ国立図書館』、講談社、1989年
[4] 原田博二「ライデン国立民族学博物館蔵川原慶賀筆『人の一生図』について―シーボルトコレクションを中心にして―」『長崎歴史文化博物館研究紀要』第4号、2009年
[5] 山梨絵美子「クンストカーメラ所蔵フィッセル・コレクションの日本絵画―川原慶賀作品を中心に―」『美術研究』378号、2003年

1. 背景

まず、フィッセルやシーボルトが日本の文物を収集した背景ついて確認しておく。オランダは18世紀後半から19世紀前半にかけて、イギリスやフランスと戦争を行っていた。戦争で打撃を受けたオランダの経済を立て直すために、貿易政策の見直しの必要があった。そこで、交易地や植民地の情報収集を行うため、画家や博物学者などが派遣されていた。また、オランダ国王のウィレム1世（WillemI）[6]は、アジア各地の自然と文化に関する文物の収集に努め、1816年にデン・ハーグで開設した王立珍品骨董陳列室に収集品を収蔵した[7]。

フィッセルは、1820年に来日し、当初はオランダ商館の一等書記官であったが最終的には次席である荷倉役にまで昇進した。フィッセルは、日本の文物収集に関して、1822年の江戸参府に随行したことがきっかけであったと著書に記している。その後1829年に日本を発ち、1830年にオランダに帰国した。1832年には、オランダ政府へコレクションの一部を売却し、それらのコレクションは王立骨董珍品陳列室に飾られた。1833年には日本に関する著書『日本国の知識への寄与』を出版した。フィッセルは日本滞在中よりコレクションの目録を作成しており、その目録の分類は、著書の章立てとほぼ同じである。以上のことから、フィッセルが日本の文物を収集した理由としては、オランダ政府へ売却すること、また著書を出版することが念頭にあったと推測できる。

一方、シーボルトは、フィッセルの来日後3年、1823年に医師として来日した。シーボルトは、日本での動植物などの調査、研究を行うことを目的に派遣されており、オランダ政府より6年間で42972グルデン、両に換算すると約3600両[8]、という多額の研究費を交付されていた。シーボルトは当初動植物の研究を行っていたが、後に日本の風俗や文化などについての文物を収集するようになり、研究費以外でも購入していたと考えられる。シーボルトは1830年に日本を離れ、1838年にオランダ政府へコレクションの一部を売却した。

王立骨董陳列室に所蔵されていたフィッセルのコレクションは後にシーボルトのコレクションと統合され、現在は共にライデン国立民族学博物館に所蔵されている。

フィッセルの記述によると、絵画について「われわれはたった一人の長崎の画匠の仲介によってしかこれらの物を入手できないのだ」[9]と記述している。フィッセルとシーボルトの絵画コレクションを見ると、両者に共通している絵師は慶賀であり、フィッセルは200点以上、シーボルトは600点以上もの作品を収集している。その他にはほとんど共通する絵師の作品はない。中国の絵師や、池大雅、長谷川雪旦、谷文晁といった江戸の絵師や京都の絵師など、さまざまな絵師の作品を収集しているが、どの絵師の作品も1点から多くとも10数点ほどであり、おそらく江戸参府の際に道中で購入したものではないかと考えられる。以上のことより、基本的にはオランダ商館員は慶賀を通してしか絵を購入できなかったことが窺える。

2. 5セットの《人の一生》

前述したフィッセルによる日本収集品目録[10]は、ライデン国立民族学博物館に所蔵されている。オランダ国王に提出された目録であり、序よりアムステルダムで1831年に作成されたものであることがわかる。全てではないが、収集品のタイトルを漢字とカタカナで記しており、内容をオランダ語で説明している。目録では収集品をAからMまでの12項目に分けている。A:Aardrijkskunde（地誌）[11]、B:Taal en Letterkunde（言語と文学）、C:Oud en Zeldzaamheden（古物と珍品）、D:Schilderijen, Printen en Afbeeldingen（絵画と版画及び肖像画）、E:Afgoden, Geestelijk-gewaad（偶像、宗教衣服）、F:Wapenen en Oorlogsgewaad（武器と軍装）、G:Plegtgewaaden en andere Voorwarpen van Statie（公式衣服とその他の儀式用品）、H:Muziek Instrumenten en andre Vootwerpen tot Uitspanning（楽器とその他の娯楽用品）、I:Opgezette Dieren, Gewassen en Schelpen（剥製動物、植物及び

---

6 WillemI（在位:1815-1840）
7 『オランダへわたった大工道具』国立民族学博物館、2000年。
8 宮崎克則「シーボルト『NIPPON』の捕鯨図」（『九州大学総合研究博物館紀要』NO.7、2009年）より、1両は6テールであり、1テールは2グルデンであった。
9 庄司三男、沼田次郎訳『日本風俗備考』2巻、平凡社、1978年。傍線は筆者による。
10 Beredeneerde catalogus van eene fraaie verzameling Japansche voorwerpen. MSライデン国立民族学博物館所蔵、M5-536
11 目録の各章のタイトルの和訳については、庄司三男、沼田次郎訳『日本風俗備考』1巻（平凡社、1978年）による。

貝類)、K:Huiselijke Gereedschappen en Kleedingen(家庭用品と衣服)、L:Gebouwen,Vaartuigen en Ambachten(建築、船舶及び手細工)、M:Diverse Voorwerpen,als Bijvoegsel(追加としての種々の目的物)、という構成になっている。このうちDの絵画と版画及び肖像画の中に、'Eene verzameling van teekeningen voor hellende de verschillend tijdperken van's menschen leeftijd.'(人間の生涯におけるいろいろな時期の描写の収集)と題された、日本人が生まれてから亡くなるまでのライフサイクルを描いた一連のシリーズについての記述がある。この作品こそが本稿で《人の一生》と呼んでいる作品群である。この一連の作品群には1番から23番まで番号が付けられており、それぞれの場面について簡単な解説をしていることから、場面が全23場面であることがわかる。

フィッセルの日本収集品目録による各場面の説明を要約したものから、《人の一生》の各場面のタイトルを、(1)「誕生」、(2)(3)「洗礼、命名」、(4)「子供の衣装替え」、(5)「男性の宿命」、(6)「交際」、(7)「結婚の準備」、(8)「両親の同意」、(9)「花嫁の贈り物」、(10)「結婚の行列」、(11)「祝宴の準備」、(12)「結婚式」、(13)「両親への敬意」、(14)「病気と老齢」、(15)「死去」、(16)「湯灌」、(17)「葬式の注文」、(18)「墓堀」、(19)「忌中の家の浄化」、(20)「葬式」、(21)「聖職者による埋葬と祈り」、(22)「寺院での葬式」、(23)「墓参り」とする。23場面の画像を巻末(図26)に載せた。全23場面の内訳は、誕生・成長に関する場面が5場面、結婚に関する場面が7場面、老いに関する場面が2場面、葬式に関する場面が9場面となっており、《人の一生》では、「結婚と葬式」に重点が置かれていたと考えられる。

本稿では5セットの《人の一生》の比較検討を行う。それぞれのセットについて確認しておこう。

①フィッセル・コレクション《人の一生》(以下、《人の一生》①とする)

所蔵先・収集者

フィッセルによって収集された《人の一生》は3セットあると言われている。そのうちの1セットはその他のフィッセルのコレクションとともに1832年、オランダ国王ウィレム1世によって購入され、現在はライデン国立民族学博物館に所蔵されている。

サイズ・材質

めくりで、サイズは1点1点異なるが、たとえば「死去」の場面のタテ×ヨコは30.4cm×44.5cmであり、その他の21点もほぼ同一サイズである。フィッセルコレクションの《人の一生》は全て絹に描かれている。

制作年

フィッセルの日本滞在時期から1820年から1829年の間に描かれたと考えられる。ただし、前述の日本収集品目録の序文には、「1822年に行われた皇帝の都への参府(※筆者注:江戸参府)と、とくに大変重要な地位にいて、しかも教養のある数人の日本人との非常に親しい関係は、私にいろいろな品物の宝を集めるきっかけを与えてくれた。」[11]と述べていることから、収集された時期は1822から1829年の間である可能性が高い。

特色

このフィッセル・コレクション《人の一生》①の最大の特徴は、唯一「慶賀」の落款が押されている点である。フィッセル・コレクションの《人の一生》のうち、ライデン国立民族学博物館にあることから、前述のフィッセル手書きの日本収集品目録に記述されている《人の一生》は、このセットを指すと考えられる。この《人の一生》には22場面が遺されているが、フィッセルの手書き目録には23場面の説明があることから、現在はない「誕生」の場面も、描かれた当時には存在していたことがわかる。さらに、黒枠が貼られていて確認できないものもあるが、このセットには漢数字で番号が記されており、その番号はフィッセルの目録における《人の一生》の1から23の番号と一致する。

図1　川原慶賀の落款(フィッセル・コレクション《人の一生》、ライデン国立民族学博物館所蔵)

[11] マティ・フォラー「ライデンのシーボルト・コレクション」『黄昏のトクガワ・ジャパン』日本放送出版協会、1998年

②フィッセル・コレクション《人の一生》(以下、《人の一生》②)

所蔵先・収集者

もう1セットのフィッセル・コレクションの《人の一生》はクンストカーメラに所蔵されている。フィッセルは1838年と1842年にロシア・アカデミー・オブ・サイエンスに日本での収集品を寄贈しており、フィッセルの皇帝宛ての書簡や、アカデミー・オブ・サイエンスの会議録、寄贈された作品の目録と、他の収集作品とフィッセルとの関わりなどから、この《人の一生》はフィッセル・コレクションであるとされている[12]。

形態・サイズ・材質

めくりで、サイズは1点1点異なるが「死去」の場面はタテ×ヨコ32.2cm×44.2cmであり、その他の場面もほぼ同じサイズである。絹本着色である。

制作年

フィッセルの日本滞在時期より、1820年から1829年とする。しかし、前述の通り、1822年から1829年の間である可能性が高い。

特色

この《人の一生》は描かれた枠のぎりぎりのところでカットされている(以下、この《人の一生》を「縁なし」と名付け、他のフィッセル・コレクションと区別する)。さらに、「見合い」「結婚の準備」「花嫁の贈り物」「結婚の行列」「結婚式」「死去」「葬式の注文」「聖職者による埋葬と祈り」の8点には作品内部にドイツ語の書き込みがある。この書き込みがいつ、誰によってなされたものなのか、現在のところ不明である。

③フィッセル・コレクション《人の一生》(以下、《人の一生》③)

所蔵先・収集者

もう1セットのフィッセル・コレクションの《人の一生》もクンストカーメラに所蔵されている。前述のように1838年と1842年にロシア皇帝へと寄贈された際に、一緒に寄贈されたものであると考えられる。

形態・サイズ・材質

めくりであり、サイズは「死去」の場面の場合、枠がタテ×ヨコ32.1cm×43.3cmで、この《人の一生》の他の作品もほぼ同じサイズである。絹に描かれている。

制作年

前述の通り、1822年から1829年の間である可能性が高い。

特色

このセットは、②《人の一生》(縁なし)とは異なり、枠の外に余白が残っている(以後、このセットを(縁あり)とする)。その余白にロシア語の書き込みがある作品が13点ある。その13点とは「洗礼、命名」「子どもの衣装替え」「男性の宿命」「花嫁の贈り物」「結婚の行列」「祝宴の準備」「結婚式」「病気と老齢」「死去」「湯灌」「忌中の家の浄化」「聖職者による埋葬と祈り」「寺院での葬式」であり、そのうちの「祝宴の準備」「忌中の家の浄化」には、ロシア語の書き込みとともに作品内部にドイツ語の書き込みがある。この書き込みについても、いつ、誰によってなされたのか不明である。

④シーボルト・コレクション《人の一生》(以下、《人の一生》④)

所蔵先・収集者

ライデン国立民族学博物館には他にシーボルトによって収集された《人の一生》が所蔵されている。

形態・サイズ・材質

めくりであり、「死去」の場面はタテ×ヨコ31.5cm×44.3cmの大きさで、この《人の一生》④のセットの他の作品もほぼ同じサイズで描かれている。絹本着色である。

---

[12] 山梨絵美子「クンストカーメラ所蔵フィッセル・コレクションの日本絵画―川原慶賀作品を中心に」

制作年

シーボルトの来日期間から、1823年から1829年の間に描かれたと考えられる。シーボルトは「私の日本滞在の最初の二、三年は自然科学関係のコレクションを収集することと、日本の文学を研究することだけに集中したが、その後、1826年の江戸参府のときに民族学的なものにも興味が移り、この分野の総合的なコレクションを開始した」[13]と述べているため1826年以降に収集した可能性もある。

特色

シーボルトコレクションの《人の一生》は唯一23場面が全て揃っている。

⑤収集者不明《人の一生》(以下、《人の一生》⑤)

所蔵先・収集者

長崎歴史文化博物館所蔵の《人の一生》⑤は、オランダ国内で最近発見されたものであり、ライデン国立民族学博物館の仲介によって長崎歴史文化博物館が購入した。ブロムホフ、フィッセル、シーボルトのうちのだれかが収集したのか、それとも3人以外にも川原慶賀に絵を注文し、《人の一生》を持ち帰った者がいるのか収集者については不明である。

形態・サイズ・材質

めくりであり、絹に描かれている。「死去」の場面のサイズはタテ×ヨコ32.4cm×43.3cmであり、この《人の一生》⑤もほぼ同じサイズで描かれている。

制作年

誰が収集したものか不明なため、制作年も不明。構図から《人の一生》②～⑤の制作年と近い時期であることが推測される。

特色

浴室の衝立に貼られており、状態はあまりよくない。

3.《人の一生》の手本

以上、5セットの《人の一生》についてその基本情報を確認してきた。それぞれのセットで現存している枚数は異なるが、前述のようにすべて23場面として制作されたと考えられる。それでは、《人の一生》は何を元にして描かれたのであろうか。長崎の人々の生まれて亡くなるまでを実際に見て描いたのであろうか。この点を明らかにするため結婚に関する7場面に注目する。

フィッセルとシーボルトの和本コレクションの中に『絵本婚礼道しるべ』(ライデン国立民族学博物館所蔵)という和本がある。1813年に京都で菱屋治兵衛により出版されたもので、画工は京都の浮世絵師、堀田連山であり、見合いから出産、袴着などまでが描かれた結婚の次第についての絵本である。序によると、「父母に孝を尽し嫁てハ夫につかへ舅姑に孝をなし…(中略)…貞心を尽し益々家富栄へ子孫長久し給ハんことを希のミ、婚礼道しるべと題し目出度事の数々を顕し幼女の翫に備ふるとしかり」とあり、幼い女の子のための教育本という側面が強いと考えられる。

《人の一生》と『絵本婚礼道しるべ』のそれぞれの場面展開を見てみると、《日本人の一生》は、(1)交際(2)結婚の準備(3)両親の同意(4)花嫁の贈り物(5)結婚の行列(6)祝宴の準備(7)結婚式であり、『絵本婚礼道しるべ』は(1)見合(交際)(3)結納の式(両親の同意)(4)嫁入道具(花嫁の贈り物)(5)嫁入の式(結婚の行列)(6)台所[14](祝宴の準備)(7)祝言の座敷(結婚式)である。『絵本婚礼道しるべ』には(2)結婚の準備の場面がなく、祝言の後は色直しの場面へと続く、といった差異はあるものの、ほぼ同じような場面展開をしている。では、各場面の内容を比較して、その関係性をみてみよう。なお図2から図10の慶賀の作品は、ライデン国立民族学博物館所蔵のフィッセル・コレクションである。

---

[13] マティ・フォラー「ライデンのシーボルトコレクション」『黄昏のトクガワ・ジャパン』

[14] 『絵本婚礼道しるべ』の作品名は本文に記述されている題名を使用したが、台所の場面には適当な題名が記されていなかったので筆者が場面より作品名を「台所」とした。

(1)交際(見合)

図2　《人の一生》①と『絵本婚礼道しるべ』の「交際(見合)」

図3　川原慶賀「見合」

「交際」では、桜の下で若い男女が見合いをする場面が描かれている。扇子を持って片足を上げて座る花婿となる男性のポーズや、花嫁となる女性を見る仲人らしき中央の女性のポーズは共通している。《人の一生》の「交際」の場面は、『絵本婚礼道しるべ』よりも登場人物が省略されて描かれており、男性のとなりには女性ではなく男性が描かれている。また、慶賀の作品の中にこのような「見合」の場面を《人の一生》とは別の構図で描いた作品がライデン国立民族学博物館にある。この作品を『絵本婚礼道しるべ』と比較すると、登場人物、衣服、構図が酷似していることがわかる。

(2)結婚の準備

「結婚の準備」は、花嫁の両親の家に仲人が結婚の話をしに来た場面であると考えられる。『絵本婚礼道しるべ』には、こういった場面は描かれていない。

図4　《人の一生》①の「結婚の準備」

(3)両親の同意(結納の式)

「両親の同意」では、花婿の家から花嫁の家に結納の品が到着した場面が描かれている。《人の一生》では、ほとんど品物は見えないが、平伏して互いに挨拶をする使いの者とその後ろに屏風、という構図はよく似ている。《人の一生》の「両親の同意」の場面には、結納の品を運んだ者たちが付け加えられている。

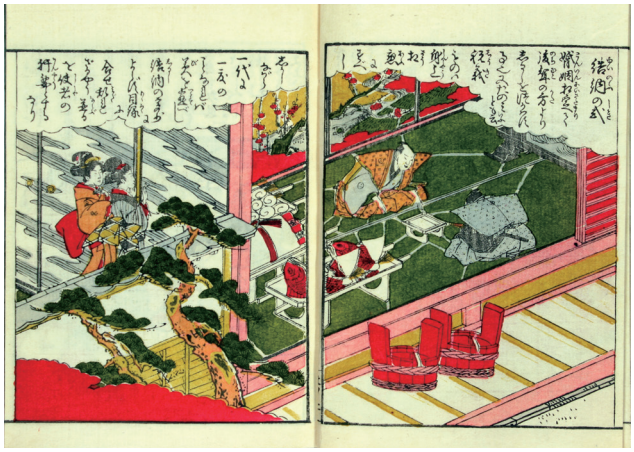


図5　《人の一生》①と『絵本婚礼道しるべ』の「両親の同意(結納の式)」

(4)花嫁の贈り物(嫁入道具)

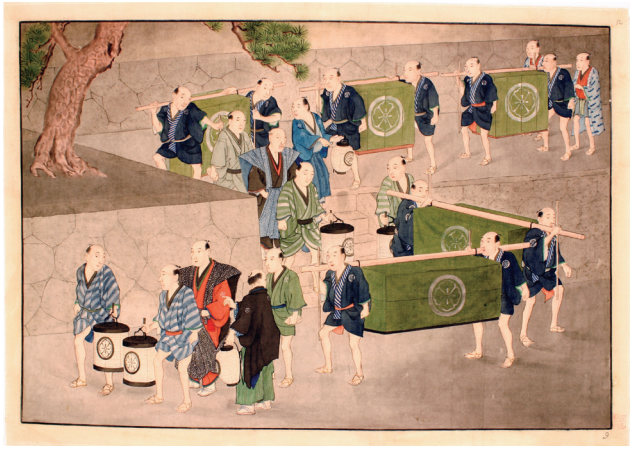


図6　《人の一生》①と『絵本婚礼道しるべ』の「花嫁の贈り物(嫁入道具)」

「花嫁の贈り物」では、花嫁の家財や衣類など、花嫁道具を花婿の家へと運んでいる場面が描かれている。《人の一生》①の「花嫁の贈り物」では、階段をつかって行列を曲げて描いているという違いは見られるものの、長持を運ぶ人々のポーズは共通している。

(5)結婚の行列(嫁入の式)

「結婚の行列」では、花嫁が輿に乗っている場面が描かれている。「花嫁の贈り物」と同じように、階段によって行列を曲げるという構図は『絵本婚礼道しるべ』には見られない。また、《人の一生》①の「結婚の行列」は道中が描かれているのに対して、『絵本婚礼道しるべ』では花婿の家に到着した場面が描かれている。

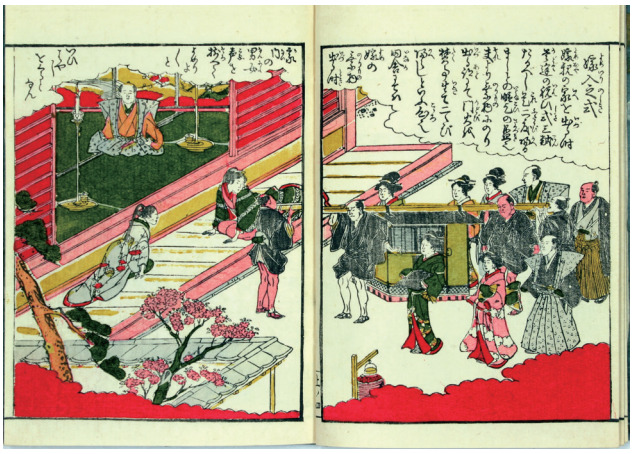


図7　《人の一生》①と『絵本婚礼道しるべ』の「結婚の行列(嫁入の式)」

(6)祝宴の準備(台所)

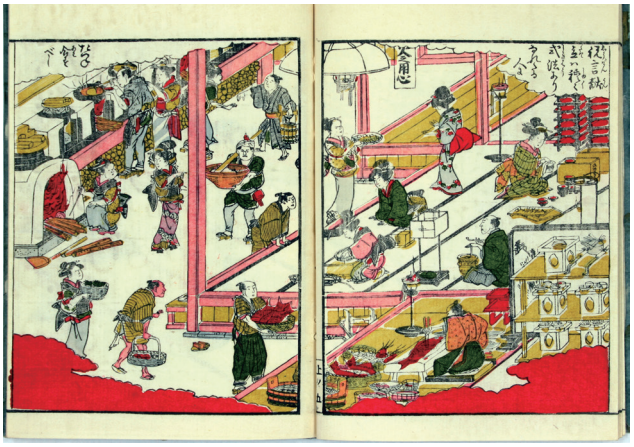


図８　《人の一生》①と『絵本婚礼道しるべ』の「祝宴の準備(台所)」

「祝宴の準備」では花婿の家の台所で結婚式の料理の準備が行われている場面が描かれている。《人の一生》の「祝宴の準備」には描かれている人物の数が少なく、構図などにも共通性はあまり見られない。

(7)結婚式(祝言の座敷)

「結婚式」では、三三九度の盃が交わされている場面が描かれている。《人の一生》の「結婚式」は奥行きを意識した構図で描かれており、雄蝶、雌蝶を務める女性の髪型などにも差異が見られる。

ここで、再び慶賀の《人の一生》のシリーズとは別に「祝言」の場面を描いた作品を見てみると、「見合」の場面と同じように登場人物、構図などが酷似している。

図9　《人の一生》①と『絵本婚礼道しるべ』の「結婚式(祝言の座敷)」

図10　川原慶賀「祝言の座敷」

以上、《人の一生》の結婚に関する7場面のうちの6場面と『絵本婚礼道しるべ』の対応場面をそれぞれ比較した。《人の一生》ではない慶賀の作品のうち、「見合い」と「祝言」は『絵本婚礼道しるべ』の対応する場面と構図や登場人物が酷似しており、慶賀が『絵本婚礼道しるべ』を参考にして絵を描いていたことは明らかである。《人の一生》と『絵本婚礼道しるべ』は、全く同じように描かれているというわけではないが、『絵本婚礼道しるべ』は《人の一生》の結婚に関する場面を描く際に参考にした和本の一つであったと考えられる。原田氏は慶事の料理に桃饅頭が描かれていることなどから、長崎が《人の一生》の舞台になっていると述べているが[15]、以上のことから、長崎の風習だけでなく和本などを手本にして描いたものである可能性が高い。

4.《人の一生》の制作

《人の一生》の5セットはすべて1枚物で作成されており、絹に描かれている。さらにこの5セットの構図は似ており、特に②～⑤の4セットは酷似した構図が用いられている[16]。そこで、どの程度似ているのか、ということを明らかにするために、「結婚の準備」の場面を例にして描かれた建物や置物などの寸法や角度を計測、比較し、《人の一生》の制作方法を検討した。

まず、それぞれの絵を見ていこう。すると、一見してわかるように、建物、人物、家具などの配置はほぼ一致している。

図11　《人の一生》①「結婚の準備」（ライデン国立民族学博物館所蔵）

[15] 原田博二「ライデン国立民族学博物館蔵川原慶賀筆『人の一生図』について―シーボルトコレクションを中心にして―」
[16] 《人の一生》①については、《人の一生》②～⑤と異なる構図で描かれている場面もある。

図12　《人の一生》②「結婚の準備」（縁なし）（クンストカーメラ所蔵）

図 13　《人の一生》③「結婚の準備」（縁あり）（クンストカーメラ所蔵）

図14　《人の一生》④「結婚の準備」（ライデン国立民族学博物館所蔵）

図15　《人の一生》⑤「結婚の準備」（長崎歴史文化博物館所蔵）

次にそれぞれの作品の中で計測した箇所は以下の通り19箇所で、その計測結果を表1に示す。なお、図16は、シーボルト・コレクション「結婚の準備」の場面に計測個所の番号を付し、番号を見やすくするために、輪郭を浮き出す画像処理を加えた。

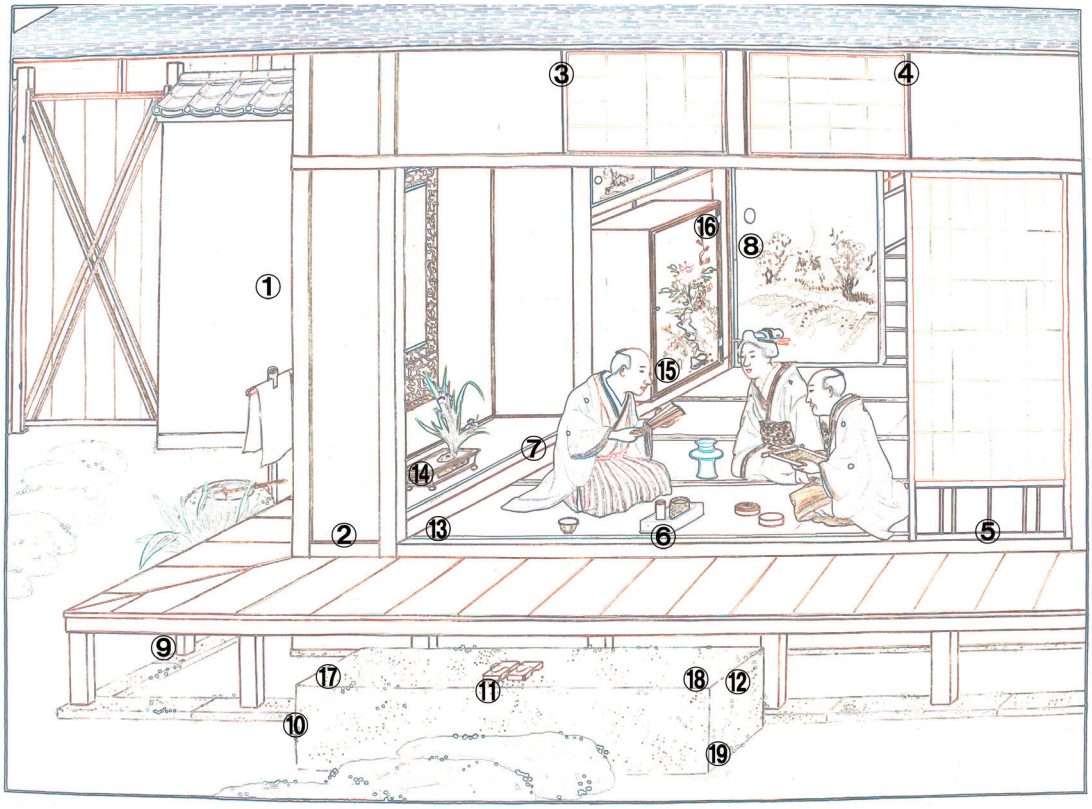


図16　「結婚の準備」の計測個所

表1　「結婚の準備」計測結果

	《人の一生》①	《人の一生》②	《人の一生》③	《人の一生》④	《人の一生》⑤
寸法(cm)					
タテ	30	32.3	32.4	32.4	32.4
ヨコ	44.1	44.3	43.4	44.4	43.6
①柱	18.2	20.6	20.8	20.4	20.5
②壁下部	4.1	4.2	4.3	4.2	4.2
③壁上部(左)	–	13.2	13.4	13.4	13.1
④壁上部(右)	–	13.8	14	14	13.8
⑤障子下部	4.1	6.7	6.8	6.8	6.7
⑥部屋敷居	19.6	19.8	20.2	20.1	19.8
⑦部屋奥行	16.8	14.3	14.5	14.7	14.3
⑧襖	6.6	7.9	7.9	8	7.9
⑨縁側の柱(間)	7.1	5.8	5.95	6	5.8
⑩石(タテ)	2.5	3.5	3.4	3.4	3.5
⑪石(ヨコ)	18.25	16.6	16.6	16.5	16.3
⑫石(奥行)	1.4	2.9	2.9	2.9	2.8
角度(°)					
⑬畳	27	28	28	27	30
⑭床の間	62	63	63	62	63
⑮棚(左下)	62	63	63	63	60
⑯棚(右上)	64	64	64	67	65
⑰石(上面の左下)	27	30	30	30	31
⑱石(上面の右下)	148	145	145	141	–
⑲石(右側面の左下)	54	50	50	50	–

表1では、各部分の寸法における誤差のうち、1～2mm、もしくは1～2度程度の箇所をピンク、3～4mまたは3～4度程度の箇所を、水色で示した。その結果、誤差は大きいものでも2mmから4mm程度であり、角度においても2、3度の違いが見られる程度である。《人の一生》②（縁なし）、《人の一生》③（縁あり）、《人の一生》④、《人の一生》⑤は、建物の配置などに関してはほぼ同じ寸法で描かれていることが明らかである。このことから、《人の一生》には雛形があり、それをトレースして制作していたことが推測できる。

それでは、細部の描かれ方はどうであろうか。それぞれの顔の描かれ方に注目する。

図17　「結婚の準備」における仲介人と花嫁の母親（左より①、②、③、④、⑤）

仲介人と花嫁の母親の顔を比較すると、《人の一生》①では顔が面長で鼻の穴まで描かれている。《人の一生》②の仲介人は髭が濃く描かれており、《人の一生》③では、人物の顔が細長で目と目の間が近い。《人の一生》④の人物の顔は丸く描かれており、《人の一生》⑤では顔が比較的面長に描かれており顎が小さい、といったようにそれぞれ異なった特徴が見られる。さらに、「結婚の準備」以外の場面について比較すると、例えば図18の「忌中の家の浄化」の炎の描き方にも違いが見られる。このことから、①～⑤の《人の一生》はそれぞれ別の絵師によって描かれたと考えられる。

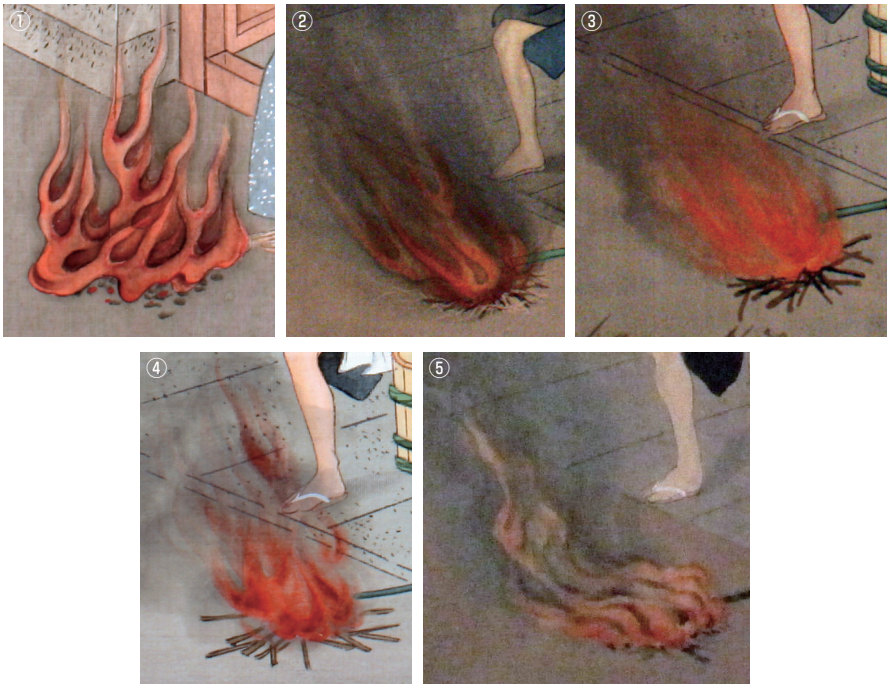


図18　「忌中の家の浄化」部分図（上①、②、③、下④、⑤）

5セットの《人の一生》のうち、4セットの《人の一生》②～⑤は、柱や床など建造物の大枠の長さ、角度がほぼ同じであるのに対し、顔の描き方や着色、床の間やふすまなどの細部はそれぞれ異なっている。《人の一生》の複数人による制作は明らかであり、建物や人物の位置、木などの下書きは大まかに雛形をトレースし、顔、着色などの仕上げを行う、という方法で制作を行ったと考えられる。陰影の付け方やふすまなどの細部は各人に任せられていたのであろう。

各場面の比較から、それぞれのセットに見られる特徴について考察する。

《人の一生》①

図19　《人の一生》①
「洗礼、命名」部分

「結婚式」部分

「結婚式」部分

（ライデン国立民族学博物館所蔵）

《人の一生》の5セットの中で唯一慶賀の印が押された、①ライデン国立民族学博物館所蔵のフィッセルコレクション《人の一生》に見られる特徴を確認する。まず、人物に関しては慶賀が描く人物は顔が大きく面長である。目と目が離れており、鼻の穴が描かれていることが特徴としてあげられる。次に着物や建物の細部については、着物のぼかしなど着色が丁寧になされており、着物の家紋も描き込まれている。また、柱などの木目といった細部まできちんと描かれている。これらの特徴は《人の一生》以外の「慶賀」の落款が捺された絵においても共通しているため、《人の一生》①は慶賀によって描かれたと考えられる。

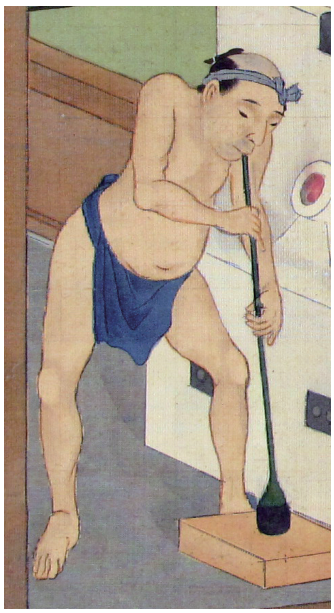


図20　「ガラス細工」

「冬」

「潮汲み」

（フィッセル・コレクション、「慶賀」の落款あり、ライデン国立民族学博物館所蔵）

《人の一生》②（縁なし）

前述したように、男性の髭を濃く描くこと、さらに人物に影を濃く付けることが特徴としてあげられる。「墓掘」の場面では、穴を掘っている男性たちや、草を刈っている男性に濃い影が描かれている。

図21　《人の一生》②（縁なし）「墓掘」

「墓掘」部分図

（クンストカーメラ所蔵）

《人の一生》③（縁あり）

顔が細い楕円形で描かれており、特に夜の場面においては人物の顔に陰影を濃く付けている。また、顔の輪郭すべてを線で描くのではなく、茶系の陰影をつけることによって頬を立体的に描いている。

図22　《人の一生》③（縁あり）「結婚式」部分図

「祝宴の準備」部分図

（クンストカーメラ所蔵）

《人の一生》④

顔が丸顔であり、鼻も丸く、鼻筋を眉間近くまで描くという特徴が見られる。

図23　《人の一生》④「子どもの衣装替え」部分図　　「洗礼、命名」部分図

（ライデン国立民族学博物館所蔵）

《人の一生》⑤

顔は面長でやや顎を小さく描かれている。また、髭の付け方が特徴的である。

図24　《人の一生》⑤
「交際」部分図

「墓掘」部分図

（長崎歴史文化博物館所蔵）

前述した慶賀の作品の特徴を踏まえると、②～⑤の《人の一生》は、慶賀の特徴と似ている個所もあるものの、違いが目立ち、描写力や色彩などの点で劣っている。このため、これらのセットには慶賀の作品は含まれていないと考えられる。さらに、このような特徴はそれぞれのセットを通して共通して見られるものであり、1セットが同一人物によって描かれたものであると言えよう。つまり、4セットの《人の一生》の制作に関しては、顔を描く人、木を描く人、といったように分業制で描かれたのではなく、1人1人が1セットずつ担当して制作したと考えられる。

最後に補足として、もう一つの《人の一生》について言及しておきたい。フィッセルやシーボルトが《人の一生》を収集するよりも前にブロムホフは《人の一生》を収集している。ブロムホフが収集した《人の一生》の詳細については以下の通りである。

図25　ブロムホフ・コレクション《人の一生》「誕生」（ライデン国立民族学博物館所蔵）

所蔵先・収集者

ブロムホフによって収集された《人の一生》はライデン国立民族学博物館に所蔵されている。ブロムホフは第1回目の出島滞在時、慶賀の作品を1816年に創設された王立骨董陳列室に送っている。また、オランダ国王ウィレム1世はブロムホフ・コレクションを、1824年に購入している[17]。そのいずれかの際にこの《人の一生》は王立骨董陳列室へ所蔵されることになったと考えられる。

形態・サイズ・材質

現在は折本形式のアルバムに仕立て直されているが、元の形を復元すると、本来は絵巻であったことがわかる。アルバムの表紙のサイズはタテ×ヨコ29.5cm×41.0cmである。和紙に描かれており、洋紙で裏打ちされている。裏打ちの紙にはすかしがあり、オランダのHonig en Zoon社[18]の紙であることがわかる。この洋紙は出島のオランダ商館で使用されていた紙であるため、日本で仕立て直されたのではないか、との指摘がある[19]。アルバムの裏表紙内側にオランダ王室御用達の製本所のマークがあり[20]、日本で裏打ちされたものをオランダで製本したと考えられる。

制作年

ブロムホフの日本滞在時期から、1809年から1812年、1816年から1823年の間に制作されたと考えられる。

特色

ブロムホフ・コレクションの《人の一生》には、各場面の説明が書かれたオランダ語のメモが貼り付けられている。ブロムホフ・コレクションには、その他にも大工の道具を描いたものや、オランダ商館員の行列、狩りの行列、寺社を描いたものがある。そのうち、職人の道具を描いた作品とオランダ商館員を描いた作品は、墨でオランダ語が書かれていることからも、ブロムホフの依頼によってオランダ通詞が作品にメモを書いていたのであろうと考えられる。また、それらの作品はいずれももともと絵巻であったものを折本へ仕立て直している。ヨーロッパの人びとにとっては、絵巻は見づらかったのであろう。

フィッセルはこのブロムホフ収集の《人の一生》を見て自分も欲しくなり、慶賀にめくりのかたちで注文したものであると考えられる。日本に関する調査を行うオランダ商館員にとっては興味深い画題であったと考えられ、多くのセットを持ち帰った。

---

[17] マティ・フォラー「ライデンのシーボルト・コレクション」『黄昏のトクガワ・ジャパン』
[18] オランダの製紙業者、『川原慶賀展』西部美術館、1987年。
[19] 宮崎克則氏にご指摘いただいた。
[20] 『オランダへわたった大工道具』

おわりに

本稿における《人の一生》5セットの考察により、フィッセル・コレクションで慶賀の落款を持つセット（《人の一生》①）のみが慶賀の作品であり、それ以外のセット（《人の一生》②～⑤）は慶賀以外の絵師によって描かれたことが判明した。慶賀以外の絵師の存在に関しては、フィッセルが著書の中で「この芸術家がいかに器用で経験にとんでいるとしても、この仕事を単独でなしとげることは不可能である。そこでその目的のために、その家僕や弟子が使用される」[21]と述べており、先行研究においてもすでに言及されている。しかし、具体的にどのようにして他の絵師と作品を制作していたのか、ということに関しては具体的に明らかではなかった。《人の一生》5セットを比較検討することで、今まで不明瞭であった慶賀とその他の絵師による制作が、雛形をトレースすることによって行われていたことが明らかとなった。さらに、それぞれのセットを別の絵師が担当していることから、少なくとも4人以上の絵師とともにこれらの作品を制作していたと言えよう。現在確認している慶賀の作品のうち、フィッセル・コレクションの作品の大半には慶賀の落款が押されている。一方、シーボルト・コレクションでは慶賀の落款が押されている作品のほとんどは、比較的大きい作品であり十数点程度である。またそれ以外ではコマロフ植物研究所にある植物図譜があげられる。慶賀による植物、動物図はシーボルトが出版した図鑑で活用されており、慶賀には精密に描くことが求められたと考えられる。一方、今回とりあげた《人の一生》のような風俗などを描いた作品を見ると、フィッセルのコレクションとの重複が目立ち、慶賀以外の絵師の作品と思われる作品が多い。

シーボルトは日本の風俗を描いた作品に関して、フィッセルのコレクションを参考に慶賀に注文を行った。シーボルトより様々な作品の注文を受けた慶賀は、自分にしか描くことのできない植物や動物の絵は自分で描き、それ以外の、これまでの注文と重複する画題の絵は他の絵師に描かせたのであろう。そのようにして慶賀は、オランダ商館員の絵画需要を満たしていたのである。

（1）誕生

（2）洗礼・命名

（3）洗礼・命名

（4）子どもの衣装替え

（5）男性の宿命

（6）交際

（9）花嫁の贈り物

（7）結婚の準備

（8）両親の同意

[21] 庄司三男、沼田次郎訳『日本風俗備考』2巻、平凡社、1978年

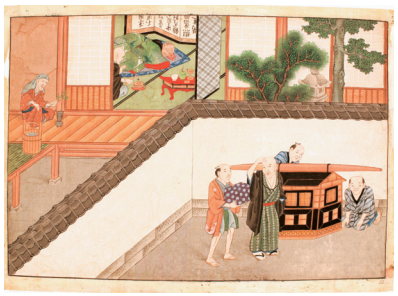
(10)結婚の行列

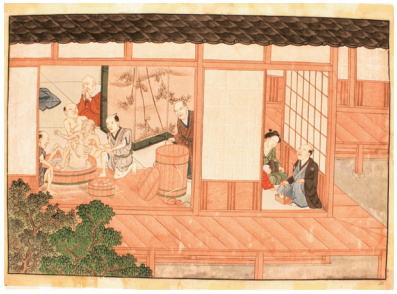
(11)祝宴の準備

(12)結婚式

(13)両親への敬意

(14)病気と老齢


(15)死去


(16)湯灌

(17)葬式の注文

(18)墓掘

(19)忌中の家の浄化

(20)葬式

(21)聖職者による埋葬と祈り

(22)寺院での葬式

(23)墓参り

図23　《人の一生》①（フィッセル・コレクション、（1）のみシーボルト・コレクション、ライデン国立民族学博物館所蔵）